

王妃 マリー・アントワネット

3 嵐の終り

遠藤周作



朝日新聞社

一・アントワネット

3

嵐の終り

遠 藤 周 作



朝日新聞社



王妃 マリー・アントワネット

3

嵐の終り

1980年9月25日第1刷発行

著者

遠藤周作

発行者

朝日新聞社 藤田雄三

印刷所

凸版印刷株式会社

発行所

朝日新聞社

東京・大阪・名古屋・北九州

定価 960 円

©Shūsaku Endō 1980

0023-254639-0042

目

次

破局

7

フェルセン

25

幽閉

55

一月二十一日

78

永遠の愛

96

最も辛い日

裁判

最後の朝

取材余滴

115

139

181

209

装画・深井 国 装幀・多田 進

王妃 マリー・アントワネット

3 嵐の終り

「週刊朝日」一九七九年一月九日号より八〇年七月二五日号まで連載。

破 局

午前零時を過ぎていたが、ヴァレンヌの町民たちはこの夜、全員目を覚ました。クリスマスの夜以外にはこんなことはこの町には絶対になかった。彼等は衣服をつけ、急いで真暗な通りに出た。

「王さまが擱まった——」

「王さまも王妃さまも今、食料品屋のソースの家に閉じこめられている」

富んだ者、力のあった者の不幸を見るのは誰にも楽しい。月あかりに照らされた夜の路を町民たちはまるで珍しい見世物を見に行くように流れていく。

王さまは 冠をぬいで

茶色の服を着てござる

王妃さまはおどおどと

命ごいをしてござる

食料品屋ソースの家の前は砂糖に集った蟻の群のように町の連中が黒くかたまっていた。国民

衛兵が家の窓からなかを覗きこもうとする彼等を叱りつけ、町役場の町会議員たちが重々しい顔をして家のなかに入っていた。

「見えたよ」

と女の一人が興奮して、周りをかこんだ仲間たちに話している。

「あれが王さまかしらん。パンを食べていた。え？ 小さな肥った人だよ」

「王妃さまは」

「椅子にぐったり腰かけて、眼をつぶっていたよ。眠いんだろうねえ」

間もなく判事があらわれた。デステという名の男でこの町でただ一人、王の謁見を受けた男である。デステはこのコルフ夫人とその従僕や侍女と名のる一行が国王夫妻であるかどうか、首実検をするために姿を見せたのだった。

デステが食料品屋ソースの家に入ると、廊下につめかけていた町会議員たちはいっせいに沈黙した。そしてデステの一挙一動を注目した。

デステは部屋に入った。眼の前に椅子に腰をかけてパンをちぎり、葡萄酒を飲んでいる一人の男がいた。そのかたわらに姿勢ただしくヴェールに顔をかくし、じっと身じろがぬ気品ある女性がそれを眺めていた。

「陛下」

とデステは声をかけた。

男はうなずいた。廊下につめかけていた町会議員たちからどよめきがあった。

この時、この家の周囲をかこんでいた町民たちがあわてて路をよけた。三十名ほどの軽騎兵の一行が馬をとばしてこちらに向ってきたからである。

指揮官らしい将校は馬をとびおりると、急いで食料品店に駆けこんだ。部下の兵士たちは国王一家の二台の馬車にのぼっている若者たちを追い払い、その周りを警護した。

「陛下」

将校は廊下を歩きながら大声で叫んだ。

「ショワズール公爵でございます。軽騎兵三十名を連れてお迎えに参りました」

夫の傍らで身じろがなかった王妃マリー・アントワネットがこの声をきいた時、はじめて嬉しげに、

「あっ」

と叫んだ。

遂に味方が来てくれたのだ。行く先々の町で探していたあの味方の護衛兵が遂に姿をみせたのである。

「公爵」

彼女はそう叫んで椅子から立ちあがり、恭しく身をかがめた将校に手をさしだした。

「陛下。御命令を」

「ここを出させてくれるのか」

「その決心でございます」

「我々を守る兵は何人だ」

「三十人にございます」

国王の顔にも王妃の顔にも不安の色が走った。

「三十人か」

ルイ十六世は廊下に立っているヴァレンヌの町会議員に聞えぬように声をひくめて、

「しかし敵は七、八百人は集めてくるだろう」

「そうかもしれません」

「すると私はともかく、王妃や子供たちに万一の危険がないとは言えぬ。そうであろう」

「その時は、全員、戦死の覚悟でございます」

ルイ十六世は妻の顔を見た。彼は自分で結論をすぐに出すには、あまりに弱すぎた。マリー・アントワネットはその指でヴェールを持ちあげ、

「子供たちに……万一のことがあるのなら」

と不安げに呟いた。

あとになって考えてみると、この一瞬こそ国王と王妃とその子供たちの運命を決定的にしたものだった。もし国王に多少の決意があれば、マリー・アントワネットが子供たちの危険を無視したならば、彼等の運命は別の方向に変わったかもしれないのだ。

だが――、

だが夫はマリー・アントワネットをこれ以上、苦しめたくはなかった。彼はあまりにやさしすぎた。

「結論を夜あけまで待とう」

と彼はひくい声で、

「とにかく、三十名の輕騎兵では少なすぎる。私の考えでは夜あけまでにブイエ將軍の護衛兵がこのヴァレンヌに到着すると思う。それからになって強行突破しても遅くはあるまい」

この妥協案が彼の口から出た時、すべての希望は断たれた。フェルセン伯爵があれほど細心に計画した国王一家の脱出の案はここで終ってしまった。

夜がふけた。眠りこけている王子と王女とは別にして、国王も王妃もエリザベート内親王をはじめ、他の大人たちは一睡もしていない。国王夫妻はショワズール公爵と共に椅子に腰かけ、無言でブイエ將軍麾下の部隊がこの町に迎えにくる足音をひたすら待った。

五時――。

「あれは」

と国王はその馬蹄の響きを耳にしたのか嬉しげに叫んだ。

「聞えぬか」

夜の帳が少しあけはじめていた。遠くから馬の蹄が聞える。その響きはたしかに、こちらに向ってくる。

アントワネットは椅子から立ちあがり、窓に額を押しあてた。向い側の家々の輪郭がおぼろげながら見えはじめた。路のあちこちでまだ国民衛兵が立っている。

馬蹄の音が大きくなる。馬にのった二人の士官の姿がやっと薄ぐらい路にあらわれる。国民衛兵が彼等の前にたちだかり、命令を聞いて、あわてて路を開く。ブイエ將軍の部下たちではなかったのだ。それは国王たちの敵の士官だったのである。

二人の士官はラ・ファイエット將軍の命を受けて国王一家を追跡したバイヨン大尉とその彼にあとから合流したラ・ファイエット將軍の副官ロムーフである。

汗をしとどにかいた馬を国民衛兵にわたして彼等は埃まみれの長靴をならして国王のいる二階にのぼった。軍服はよごれきっていたが身じまいを直すことも忘れていた。

「陛下……お戻りになってください。巴里に」

とバイヨンはしどろ、もどろに訴えた。

「国民議會からの令状を持って参りました」

「ラ・ファイエット將軍からのか」

「いいえ、国民議會からの命令状でございます」

国王は黙っている。王妃は窓の方を向いて二人をまったく黙殺している。

「陛下。お助けください、我々を。我々は手ぶらで巴里には戻れませぬ。私たちの妻や子供をお守りください」

「わたくしも」とマリー・アントワネットがこの時、はじめて口を利いた。

「子供を守らねばならぬ母ですわ」

ブイエ將軍の部隊は一体どうしたのだろう。それだけが国王と王妃との希望だった。

朝になった。一度は引きあげた町民たちがまた食料品屋の家の前につめかけた。物売りまで出て朝のパンを売っている。国王たちはそれら群集の叫び声を聞く。

「ぐずぐずするな」

「早く馬車に入れて巴里につれて帰れ」

大衆の罵声、怒号にはもうマリ・アントワネットは馴れていた。彼女はとくに民衆を信じる気持はなくなっていた。昨日は自分に手をふり、歓迎の声をあげた民衆が今日は野獣のような怒声を浴びせてくる。信念も思想もなく、ただ状況と情勢によってくる変るのが民衆だと彼女は思うようになった。

その罵声のなかで国王夫妻もエリザベート内親王も侍女の二人の婦人もただ頑なに沈黙を守りつづける。バイヨン大尉が、

「陛下、お願いです」

と泣かんばかりに哀願をつづけている……。

この時刻――、

国王一家の脱走を助けるべくブイエ將軍みずからの指揮する部隊はヴァレンヌの町を目指して砂煙をあげて疾駆していた。あと一時間で彼等は国王たちをヴァレンヌの町民たちから救いだし、二台の馬車に乗せて脱出することが出来るだろう。

「馬に鞭を入れよ」

將軍は兵士たちに命令をくだした。馬上の兵士たちはその命令をきくや、馬腹を激しく蹴って全速力でヴァレンヌに向った。

食料品店をかこんだ群衆の喚声はますます大きくなる。

「陛下、お聞きください。あの通りでございます」

ロムーフとバイヨン大尉の二人はとりすがらんばかりに哀願を続けた。

「もし、このままにしておきますと、あの町民たちはこの家に雪崩れこむかもしれません。そうなれば御身の御安全も私たちには保証しかねます」

国王はまだ横をむいて返事をしなかった。

「では陛下。陛下御自身の口であの町民たちを静めてくださいますよう」

ルイ十六世は澁々と椅子から立ちあがって窓を開いた。幾百という男女の顔が彼を注目し、そして大声で合唱した。

「戻れ、戻れ、巴里に戻れ」

「でないと、俺たちの手で首つりにするぞ」

国王も王妃もあのヴェルサイユ宮殿を囲んだ民衆を連想した。あの民衆たちも同じ言葉を同じ声で叫んでいたのだ。

「十一時まで」

と遂に国王はふりかえってバイヨン大尉に弱々しい声を出した。

「出発を待ってくださいだろうか」

「いけません。それまであの連中は辛抱できないでしょう」

脅迫と嘆願と窓から嵐のように吹きこんでくる人々の叫びに国王はもう抗うことはできない。

「では……食事ぐらいさせてくれ」